

待降節第二主日

2015.12.6

ルカ 3・1-6

たけうち おさむ
竹内 修一神父(イエズス会)

師走になり、皆さん、慌ただしい時を過ごしているかと思います。しかし、あと一か月もすれば、新年を迎えます。それにしても、やはり、この季節は一種独特な雰囲気をもった時だと思えます。昔ほどではありませんが、それでも、肌で生活を感じることでできる時ではないかと思えます。そのような感覚によって、私たちは季節を迎え、その中に生きる自分を確かめます。それを人は、「生活」と言います。

夜中に目が覚めることがよくあります。そんなときは、(寝なければ)と無駄な抵抗はせず、ラジオのスイッチを付け、「ラジオ深夜便」という番組を聞きます。曜日によって担当者は代わるのですが、(さすがだな)と思うことがあります。それは、おしなべて、アナウンサーの語る言葉とその語り口調が美しいということです。ですから、彼らの語る言葉は、すつとこちらに入って来ます。

ことばによって造られた

神のことばが、自分の心に落ちてくる——それはいったい、どういうことなのだろうか。そのことについて、今日は、御一緒に考えてみたいと思えます。神は、決してがなり立てるような語り方はしません。むしろ、ささやくようにして、私たちに語りかけます。

ご存知のように、旧約聖書の最初には、「創世記」という物語があります。その冒頭で、いわゆる、天地創造の物語が語られます。「神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である」(1・3-5)。同様に、五日間に渡る創造の営みが語られます。そして六日目になって、人間が造られます。

一日目から五日目まで、神は、自らの造られたものをご覧になり、「良しとされた」と語られます。しかし、人間の造られた後では、「極めて良かった」と語られます。さらに、神は、次のように語ります。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ」(1:28)。「支配せよ」——どこか引っかかりを感じる言葉ですが、その本来の意味は、「世話をせよ」ということのようにです。決して、勝手気ままに操作・コントロールしてもいい、といった意味ではありません。すべての命に対して、丁寧に世話

をすること——それが、神が人間に託したことです（残念ながら、その人間が、環境破壊を起こしているのですが）。

他の生物の命を慈しみ、その世話をすること、それが、私たちのすべきことです。このことは、自然との関わり、周りの人との関わり、そしてこの地球から宇宙に至るまで、あらゆる関係において求められることです。

心は心に語る

すべての創造において、聖書は、次のように語ります。「神は言われた。『～あれ。』こうして、～があった。」「言われた」ということは、「言葉を使った」ということです。つまり、すべては神の言葉によって造られた、ということです。

同様に、神は、言葉を使って私たちに語りかけられます。言葉の大切さを思い起こすとき、19世紀の偉大な神学者、ジョン・ヘンリー・ニューマン（1801－1890）を思い出します。ニューマンは、もともと英国国教会の司祭でしたが、他の友人たちとともにカトリックに転宗します。いわゆる、オックスフォード運動です。彼はその指導的立場にありました。その後、彼は、枢機卿になりますが（1879年）、そのとき、彼は、自分のモットーとして、紋章に次のような言葉を記しました——「*Cor ad cor loquitur*」（心は心に語る）。

誰かに自分の思いを伝えたい——そのようなとき、私たちは、難しい言葉を使う必要はありません。むしろ、単純な言葉で十分です。例えば、それは、八木重吉の詩のような、シンプルで透明な言葉で良いのです。言葉がいつそう単純に研ぎ澄まされるとき、それは祈りとなります。反対に、饒舌になればなるほど、祈りから遠いものとなります。

いのちのことば

「ヨハネによる福音書」の冒頭には、次の言葉があります。「初めに言^{ことば}があった。言は神と共にあった。言は神であった。……。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」（1・1－5）。ここで語られる「言」とは、恐らく、イエスのことだろうと思います。人々は、この光を理解しませんでした。ですから、人々は、イエスを殺してしまったのです。これは、二千年前に起きた事実です。そして、その事実の延長線上に、私たちの日々の生活があります。これはいったいどういうことなのでしょう。

今もなお、神は、言葉をとおして私たちに語りかけています。もしそれがなければ、私たちの生活は、瞬く間に崩れ去ってしまうでしょう。砂の上の家が

崩れるよりも、もっと簡単に、私たちのいのちそのものが、消え失せてしまうでしょう。いのちにつながっていなさい——これが、神からのメッセージです。

イエスは、二千年前にこの世に誕生しました。クリスマスの物語です。物語には、話の流れといったものがあります。同様に、物事には、順序があります。順序とは、別の言い方をすれば、「段取り」です。例えば、大工さんは、家を建てる時、ちゃんと段取りをつけてから仕事に取り掛かります。また料理を作るときにも、段取りが求められます。段取りを違えると、その修復は不可能とは言わないまでも、そのためには大変な時間と労力が求められます。

このように、一つひとつの人間の行為に段取りが求められるとするならば、人間の生き方そのものにも段取りが求められるのではないのでしょうか。自分のいのちを育むにあたっての段取りは何か。それを見極めること。それが、人間に求められている生きる知恵であり賢さです。人間の賢さとは、そういうところにあるのだと思います。

神は、言葉によってすべてを造り、言葉をとおして今もなお私たちに語りかけています。これが創造の営みであり、神の段取りです。神の段取りについて、私たちは、(なぜそうなのか) と戸惑うこともありますし、それを理解することができないことも少なくありません。また、時として、神の段取りの歩みがあまりにも遅く感じられ、いらいらすることもあるでしょう。このように、私たちは、神の思いが分からないために、忍耐できない自分にもいらだちます。

「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る」(ヨハ 14・18)、とイエスは、私たちに約束されました。そのことについて、八木重吉は、次のように語っています——「きりすとが／うそをつくものか／またくるといふ／こないことがあるものか。」

ヨハネは声、イエスはことば

イエスは、御父から、この世に遣わされました。そして、そのための準備をする人物が、私たちに与えられました——洗礼者ヨハネです。彼は、待降節における中心的人物の一人です。「荒れ野で叫ぶ者の声がある。『主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ』」(マコ 1・3)。荒れ野で叫ぶ者の声——それが、ヨハネです。そしてその声によって伝えられるのが、神のみ言葉、すなわち、イエスにほかなりません。

先ほど触れた「ヨハネによる福音書」の続きには、次のような言葉があります。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた」(1・14)。この言には、神の恵み(カリス)と真理(アレーテイア)が満ちていた、と語られます。ここで語られる真理とは、 $2+2=4$ とか、三角形の内角

の和は180度である、といった数学的真理とは違います。それは、ヘブライ語の「エメト」に由来するものであって、むしろ、神の誠実さ、真心を意味していると言われます。神の^{ことわり}理です。この理を弁えないと、私たちは、生きるための段取りを組むことができません。

神の真心の形

「いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべて全うされているのです」(1ヨハ4・12)。たとえこの目で神を見ることができなくても、私たちは、神を体験することはできます。感覚的な目では見ることのできない神の真心、それが見える形となって与えられました——イエス・キリストです。しかも彼は、自分では何もできない極めて弱い存在として、私たちに与えられました。ここに、神の真心はあります。

それを受け容れる心、それを「信仰」と言います。パウロは、次のように語ります。「信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです」(ロマ10・17)。心は心に語る。ならば、その語られることばを心をもって聴きたい、とそう思います。全幅の信頼をもって、それを受け容れたいと願います。

私たちは、この恵みに与ることができます。またそのような時に招かれています。それが、待降節において、私たちに与えられた恵みではないかと思えます。今日は、そのことを皆さんとご一緒に、感謝の中にこのミサをとおして味わいたいと思えます。

ジョン・ヘンリー・ニューマン John Henry Newman (1801-1890) 19世紀イングランドの神学者で、イングランド国教会の司祭からカトリックに改宗して枢機卿となった。2010年9月に列福され、福者と認定された。

